

「青年海外協力隊」

# 本田 悠里

HONDA Yuri

現場経験を積み、  
途上国に寄り添いたい

1995年1月17日、5000人以上の命を奪った阪神・淡路大震災。中でも甚大な被害を受けた神戸市長田区に住んでいた本田悠里さんは、この時初めて、避難生活を体験した。当時6才だったが、いろいろな国の人から助けってもらったことが、強く記憶に残っている。

それから数年後、高校の社会の授業で、世界の難民や移民について学んだ本田さん。「住む場所を追われた彼らの状況が、過去の自分の姿に重なりました」。青年海外協力隊を経験した先生の話を聞く機会もあり、国際協力の仕事に興味を持ち始めたのはこのころからだ。大学では文化人類学のゼミで開発途上国につ

## JICA Volunteer Story

PROFILE

1988年兵庫県出身。大学卒業後、2013年7月から青年海外協力隊(コミュニティー開発)としてジブチで活動中。

# 「難民たちに生きる力を与えたい」

紛争などの影響で周辺国から逃れて来た難民が多く暮らすジブチ。難民キャンプで活動する本田悠里さんは、より多くの人と向き合い、適切な支援の在り方を探っている。

## アフリカの難民たちのより良い生活のために

いて学び、1年間フィリピンにも留学した。スラムでのボランティア活動を通じて貧困問題の根深さを知ることになった。「もっと現地の人たちに寄り添って活動したい」と、卒業後は協力隊参加の道を選んだ。

そして派遣されたのがジブチ。アフリカ北東部に位置するこの国には、紛争などの影響で、ソマリアやエチオピア、エリトリアなど周辺国からの避難者が暮らす難民キャンプがあちこちにある。本田さんは、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)が運営するアリアデ難民キャンプで、現地のNGOである家族保護協会(APEF)の一員として活動することになった。主に任されたのが、通称「お土産プロジェクト」。今から5年前、「難民の女性の生活や地位の向上につながる」と先輩隊員が立ち上げたもので、手工芸品作りを指導し、観光客などに販売することで現金収入を得られるようにする取り組みだ。

「3代目の私の役割は、将来、地元の人たちの力でプロジェクトを継続できるようにすることです」。現在メンバーは75人。シングルマザーや障害がある家族を持つ女性など、家庭に事情を抱えた人が多い。商品の質を高めることを追求すると同時に、商品の材料を管理・分配する責任者を決めるなど、一人一人が責任と誇りを持って取り組めるよう工夫してきた。

だが、一筋縄にはいかないことも多い。「出資団体の方針転換でプロジェクトが一時止まってしまったら、品質を上げるためのアドバイスにしても、なかなか聞いてもらえなかったり」。そんな時に大きな助けとなるのが、自身も難民のAPEFの現地スタッフだ。本田さんは彼らと共に、避難してきた人々の話に真摯



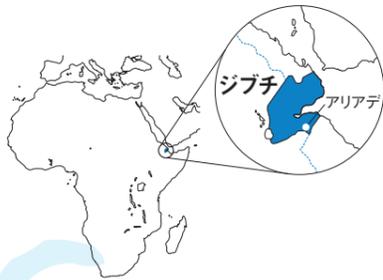
a.難民の子どもたちにアルファベットを教えるAPEFのスタッフ  
b.エチオピア難民のムラッドさんはハンドクラフトのボールペンを制作中。商品はジブチに駐留する日本の自衛隊にも販売  
c.アリアデ難民キャンプには、木でできたテントの枠組みの上に、UNHCRから配布されたテントシートを覆い被せた住居が並ぶ  
d.他の隊員と協力し、首都で暮らす難民の子どもたちを対象に絵画教室を実施

に耳を傾け、本当に一番良い方法は何かを模索している。「意欲のあるスタッフの声が組織内で反映されるように手助けすることが、プロジェクトの成功にもつながる」と確信し、今度は本田さんが彼らの「お助け役」として活躍中だ。

また、今年に入ってからAPEFが開始した首都で暮らす難民への支援を支えるため、本田さんは約4時間かけて両方のプロジェクトを行き来している。「両立は大変ですが、たくさんの人に会って話を聞くことで、さまざまな境遇の人に役立つ支援とは何かを考えることができます」と笑顔で話す。

活動を通じて、忘れられない出会いもあった。その中の一人、エチオピア出身の少年アザハルくんは11歳。アリスビエという町から首都までバスで約4時間かけて1人でやってきた。なくしてしまった家族の難民認定書を再発行し、みんなで首都に避難してくるためだ。「お母さんは逮捕歴があって、今は一緒に来られない。お父さんは失踪したから、僕ががんばらなきゃいけないんだ」としっかりと口調で話す彼から、並々ならぬ決意を感じた本田さん。新しい認定書を受け取り、難民としての待遇を受けられるよう、UNHCRの知人に掛け合い、必要な資料を用意するなど奔走した。「この子を見捨ててはいけません。その一心だった。「神戸で被災した時に誰かが助けてくれた、という記憶が今の私の行動へとつながっています。難民の人たちも今を振り返り、いつか誰かの役に立ちたい」と思ってくれたら。母親を無事に呼び寄せて「ありがとう」と言いに来てくれたアザハルくんの笑顔を見て、強くそう感じた。

さまざまな文化、宗教、習慣を持つ人々が暮らすジブチ。本田さんは多くの難民の声に耳を傾け、一人一人の置かれた状況が改善されるよう奮闘している。



「お土産プロジェクト」の参加メンバーと本田さん(右)。活動の参加証明書を受け取ってみんな笑顔だ